パーソナル学問史 オーラルヒストリーのデジタルアーカイブ化

三宅 茜巳*1 林 知代*2 田中 恵梨*3 堤井 悠来*4

＜概要＞オーラルヒストリーのデジタルアーカイブ化の過程には、対象にかかわる知識と理解、採取方法、インフォーマントとインタビュアーとの関係、提示の構成、著作権やプライバシーへの配慮等考慮すべき課題が存在する。本研究では、アメリカ文学・文化及び日本比較文学の分野におけるパーソナルな学問史の口述記録を採取、記録し、関連情報とあわせたデジタルアーカイブの開発を通じて、オーラルヒストリーの記録方法、構成及び提示方法、オーラルヒストリーの採取するプロジェクトに学生を参加させる教育的効果について考察した。

＜キーワード＞デジタルアーカイブ、オーラルヒストリー、学問史、米文学

1. はじめに

『大学・大学院におけるデジタルアーカイブ 教育プログラムの検討』**で述べたように、岐阜女子大学の人材（デジタルアーキビスト）育成教育は、1994年に出されたデジタルアーカイブ構想に対応する形で始められ、現在に至るまで学部・社会人・大学院を対象にてデジタルアーカイブ開発、管理、活用のできる人材を育成すべく教育を展開してきた。

また、岐阜女子大学では、2000年に文化情報研究センターを設置し、岐阜県内外の文化情報資料の収集を始めた。収集した資料は現物以外にデジタル化したテキスト情報、静止画、動画、音声等からなり、それぞれの資料の中には口述記録にかかわる資料も含まれている。

こうして収集された資料を活用して人材（デジタルアーキビスト）育成教育を行う中で、オーラルヒストリーを記録するプロジェクトに学生を参加させることで得られる教育的効果についてある程度成果が見られた（『口述記録プロジェクトの教育的課題』***参照）

本研究では、オーラルヒストリーのデジタルアーカイブ化の過程に存在する課題のうち特に(1)採取方法、(2)構成、提示方法、(3)オーラルヒストリープロジェクトに学生を参加させることで得られる教育的効果にある程度成果が見られた（『口述記録プロジェクトの教育的課題』***参照）

本研究では、オーラルヒストリーのデジタルアーカイブ化の過程に存在する課題のうち特に(1)採取方法、(2)構成、提示方法、(3)オーラルヒストリープロジェクトに学生を参加させることで得られる教育的効果（欠乏）について、米国文学、文化及び日本比較文学の分野におけるパーソナルな学問史の口述記録を採取、記録し、関連情報とあわせたデジタルアーカイブの開発を通じて考察した。

2. 採取方法に関する考察

筆者等は我々の先人が生涯にわたってどのように学んだかを調査、記録し、今後の学問の進め方の参考とするためオーラルヒストリーの採取を行っている。具体的には我が国のアメリカ文学、文化及び比較文学、文化研究の先駆である亀井俊介東京大学名誉教授を情報提供者（インフォーマント）としてのパーソナル学問史のオーラルヒストリープロジェクトがそれである。概要は以下の通り。

1. 先行研究とその結果

当該分野におけるパーソナル学問史のオーラルヒストリーに関する資料としては、東京大学アメリカ研究資料センター（現在はアメリカ太平洋地域研究資料センター）が1983年頃に行ったAmerican Studies in Japan Oral History Series 全31巻が存在する。**

これは、日米友好基金の援助を得てなされた事業で、戦後に日本人によって著されたアメリカ関係書、アメリカ研究書の邦訳の収集と並んで当センターの事業の一つとなっている。本シリーズは先駆的アメリカ研究の経緯を聞くという体裁をとっており、本研究の先行例としてふさわしい内容である。

そこで、今回の亀井氏のオーラルヒストリーを採取するため並行して、上流のオーラルヒストリーシリーズを読み込み、内容をまとめ本研究

*1 MIYAKE Akemi amiyake@gijodai.ac.jp *2 HAYASHI Tomoyo 例：岐阜女子大学
*3 TANAKA Eri：岐阜女子大学大学院生 *4 HORIZ Haruna：岐阜女子大学学部生

－ 418 －
の参考とした。話の内容は各個人により多少のばらつきがあるため、話者とアメリカ研究との関係に焦点を絞り、400字程度に集約した。以下は例である。

高木八尺（たかぎやさか）氏は、1924年東京大学法学部ヘンプ講座（米国憲法・歴史及び外交）を担当、戦後アメリカ学会の創設、『原点アメリカ史』の刊行に尽力。日本におけるアメリカ研究の先覚者である。

1889年英語学者・教育者神田乃武（かんだななか）の二男として生まれ、のちに祖父高松秀臣の養子になった。昭和中学校から学習院、一高、東大を経て、大蔵省に入り、1918年大蔵省を退職し、ハーヴァード・オーケストラ、ミシガン大学・シカゴ大学を経て帰国した。

中学時代より新約聖書とアブラハム・リンカーンに興味を持ち、父・友人の影響で英学に親しんだ。一高、東大時代には内村鑑三・斎藤湖雄などに影響を受けた。特に内村鑑三に関しては内村が主催する秋に参加し、信仰・倫理について多々受理を受けた。ハーヴァードではフレデリック・タナー、チャールズ・ハスキーン、エドワード・チャニング、サミュエル・モリスに歴史学を学んだ。

（2）オーラルヒストリーの記録方法

オーラルヒストリーの記録は平成24年より行っている。記録方法及び内容は以下の通りである。

【平成24年度】

平成24年度は先行例（American Studies in Japan Oral History Series）に準じ、ほぼ経年順に3期にわけ、オーラルヒストリーを採取した。

第1期：誕生（昭和7年）から東京大学の専任講師になるまで（昭和38年）

第2期：東京大学時代（昭和38年から平成5年の退職まで）

第3期：東京大学退職後現在まで

課題として見えてきたのは以下の点である。

・インタビューアーの役割的重要性

インフォーマントが提供する話に対して、その利用者（読者・聴取者）意識しつつ、足りない部分、わかりづらい部分の解釈をうまくインフォーマントより聞き出す技術・配慮が必要である。

・文字起こし担当者の課題

インフォーマントが提供する話の内容を理解していないか文字起こしが困難であるため、インタビューの現場で参加して話を聞きニュアンスを理解することが必要である。また、話の内容に関する基本的な知識と、わからないこととは都度調査する力が必要である。

例えば、「一つの女の子がいただかにしゃん」という音声から、「Keats の Ode on a Grecian」という言葉が浮かばないと音声自体を聞き取ることができない。

【平成25年度】

平成25年度は書籍を中心に置いたオーラルの撮影を行うこととした。記録は下記の3期に分けて行うこととした。

第1期：平成25年8月29日 基本図書『サーカスが来た！』

第2期：日時未定 基本図書『アメリカ文学特講』

第3期：日時未定 基本図書『ホイットマン文庫』

また、24年度の取扱方法の反省点から、今年は以下の点を改善した。

1）テーマの中心となる書籍を設定する。

2）テーマについて話者が1時間半程度話す。

3）インタビューアーの役割の重要性に関する反省点より、今回はテーマとなる書籍をあらかじめ読んだ参加者が、事前に話し合うの機会を持ち、知識と理解を共有するとともに、質問内容と担当者を決めた。それを基に時間半の座談会を開催する。そして、座談会参加者は主たる質問以外に他数の質問事項を準備し、臨機応変に座談会を進めることとした。

・事前打ち合わせ：平成25年8月15日開催

・参加者を除く参加者の事前打ち合わせを行った。参加者は亀井ゼミ生3名、大学院生2名 学部生1名、教員1名である。

・事前打ち合わせでは大変有意義で活発な意見交換がなされ、知識と理解の共通化が図られた。打ち合わせの結果決定された主たる質問内容とその他の質問は以下の通りである。

・主たる質問内容:

①アメリカ的なものについて：「ニッポと笑って見せるショーマンぶりとそ真面目さ」

・ビューリタンとユーモア これらはどこから来たのか

②大衆文化について：大衆でない文化とは ハ
イカルチャーとの対比等
②サーカス文化について：日米の比較 執筆のきっかけ
④日米の色彩の違い：亀井先生は何を色彩と感じているのか
⑤アメリカ映画におけるネティプアメリカンの扱いについて
・その他の質問例：
①アンクルトンズキャビン 小説と芝居の違い
②ターザンとアメリカンヒーロー 自然と文明の間での憂慮
③ナショナリズムについて
④サーカスが来た 執筆当時の先生の生活について
⑤アメリカでどんな旅をしてきたのか
⑥日米比較 たのしさといかがわしさ けれど
⑦亀井先生の著作権に対する考え方
⑧ショーポートについて その他
（3）関連資料の収集と整理
関連資料はインフォーマントより提供を受けた写真・文集・寄せ書き等に二次情報に対付したデータベース化した。次の資料1はインフォーマントより提供を受けた写真、資料2はその裏書、資料3は採用した二次情報に対付したデータベースの提示例である。

資料1 写真
1932年9月26日
北海道大学 北方資料室
北海タイムズ社

資料2 裏書

資料3 データベース提示例
3. 提示方法に関する考察
岐阜女子大学では、オーラルヒストリーで採取した資料のデジタルアーカイブ化を進める中で、採用したオーラルヒストリー資料の提示の構成に関して、動画とテキスト情報と関連情報を一画面上で提示し視聴することができるマルチメディア型のオーラルヒストリーの構成を提案してきた。
ところが近年急速な勢いでデジタルブックの開発普及が進み、オーラルヒストリーのデジタルアーカイブの提示について、デジタルブックも含めて考察する必要があった。そこで、本研究ではオーラルヒストリーの内容（動画・テキスト・関連情報含む）をiBooksAuthorを利用して編集し、iPadで閲覧できるデジタルブックを作成した。資料4は編集の様子、資料5はiPadでの提示の様子である。
資料5 iPad提示画面

4. 教育的効果に関する考察
『口述記録プロジェクトの教育的課題』12で述べたように、オーラルヒストリーのプロジェクトに学生を参加させることで得られる教育効果については、以下の点で効果が見られた。
①協調性、②感情の共有、③共同体意識、④言語能力の育成、⑤情報機器活用能力、⑥社会性
この件に関して、本研究では学部生（卒業研究1名）を対象に参画学生への聞き取り調査を行った結果次のような解答が得られた。
①編集について：文字起こしは楽しい。話者の意図と自分の理解に差があることが分かった。
②先行研究の調査について：話者はAというつもりで語っているのに、自分はBと聞き取りの矛盾が複数あった。

自己の役割の位置を捉えることが分かった。対談、文字起こし、校正、デジタルブックの作成までのプロセスは楽しい。

②先行研究の調査について：話者はAというつもりで語っているのに、自分はBと聞き取りの矛盾が複数あった。

自己の役割の位置を捉えることが分かった。対談、文字起こし、校正、デジタルブックの作成までのプロセスは楽しい。

自己の役割の位置を捉えることが分かった。対談、文字起こし、校正、デジタルブックの作成までのプロセスは楽しい。